

令和5年度「飼料用米多収日本一」受賞者の取組概要

褒賞名	茨城県農業再生協議会長賞
受賞者名	櫻井 博
所在地	つくば市
品種名及び作付面積	1,847.43a(夢あおば)
10a当たり収量	730kg
移植日	5月中旬
施肥(基肥)	水稻専用基肥一発肥料 50kg/10a (窒素12.5kg/10a)
施肥(追肥)	7月9日 空散用追肥306 3.3kg/10a (窒素1kg/10a) 8月3日 //
収穫日	9月下旬～10月上旬
取組内容	<p>○経営形態・経営面積・作付品種及び各面積 ・家族経営(本人、父、母、期間雇用2,3名)により、水稻22.2ha、芝0.8haの複合経営。地域の担い手として、水田のドローンによる害虫防除等の作業受託を行う等、経営規模の拡大に取り組んでいる。</p> <p>○多収品種への取組状況・作付品種及び面積・品種選択の理由等 ・以前は飼料用米としては「夢あおば」、「月の光」を作付けしていた。H29からは飼料用米としては千粒重が大きく多収が期待できる「夢あおば」に絞って作付けしている。</p> <p>○多収を達成するために取り組んだことについて ・播種・育苗の省力化による生産性向上のため、ドローンを活用した湛水直播に取り組んでいる。 ・追肥は幼穂の生育状況を確認し、ドローンを活用して2回行っている。 ・溝切機(乗用タイプ)を使用し、ほ場の外周及び内部を5m間隔で溝切りすることで、入水と排水に要する時間を短くし、適正な水管理を行っている。 ・移植前に苗に窒素を与え(弁当肥)、良好な活着と初期生育を促している。 ・耕深は18cmで行い、根圏を広く確保している。</p> <p>○生産コスト削減等の取組効果について具体的に記載 ・高密度播種育苗の導入により、育苗、苗運搬にかかるコストを低減している。 ・稲の登熟状況を管理し、立毛乾燥を行うことにより、乾燥コストを低減している。</p>

令和5年度「飼料用米多収日本一」受賞者の取組概要

褒賞名	鹿島地域飼料用米生産利用推進協議会長賞
受賞者名	直井 弘典
所在地	つくばみらい市
品種名及び作付面積	139.73a(夢あおば)
10a当たり収量	691kg
移植日	①移植:5月3日(4月2日播種、播種量300g/箱) ②乾直:3月21日播種(播種量6kg/10a、条播、畝間30cm)
施肥(基肥)	飼料用米一発肥料BBファイト055(30-5-5) ①移植:4月22、23日、30kg/10a(窒素9kg/10a) ②乾直:3月21日、33kg/10a(窒素10kg/10a)
施肥(追肥)	①移植:7月1日、②乾直:7月8日 硫安(N21%) 10kg/10a(窒素2kg/10a)
収穫日	①移植:9月10日 ②乾直:9月18日
取組内容	<p>○経営形態・経営面積・作付品種及び各面積 ・家族経営(本人(兼業)、妻、父、母の4名および期間雇用2名)により、水稲2haの水稲単作経営。</p> <p>○多収品種への取組状況・作付品種及び面積・品種選択の理由等 ・令和2年度まではコシヒカリのみ。令和3年度から、米価の低下に対応するため、コシヒカリに加え、飼料用米専用品種「夢あおば」を導入し、経営の安定化を図っている。 ・なお、令和3年度には父が「夢あおば」で「飼料用米多収日本一コンテスト」の表彰を受けている。</p> <p>○多収を達成するために取り組んだことについて ・育苗期間は長めにし(約1ヶ月)、やや大苗かつ健苗育成に努めた。 ・移植時期は5月初旬。植付本数は5~6本/株にし、コシヒカリよりやや多めに設定。栽植密度は62株/坪。育苗箱の使用枚数は約18枚/10a。 ・生育状況および幼穂形成の時期を確認し、追肥を実施した。 ・カメムシ類防除の徹底。近隣のドローン保有者に適期防除を依頼。 ・秋耕は荒起ことし、収穫後早めに実施した。</p> <p>○生産コスト削減等の取組効果について具体的に記載 ・低価格帯の肥料の活用。 ・農地の集約。 ・移植栽培の春の施肥にあたっては、なるべく移植の直前に施用し、脱窒を防ぐよう工夫している。</p>

令和5年度「飼料用米多収日本一」受賞者の取組概要

褒賞名	協同組合日本飼料工業会企画振興委員長賞
受賞者名	株式会社レイクフォー代表 栗山 茂
所在地	行方市
品種名及び作付面積	102.64a(あきだわら)
10a当たり収量	685kg
移植日	4月27日
施肥(基肥)	田植同時 BBファイト055 33kg/10a (窒素9.9kg/10a)
施肥(追肥)	無
収穫日	9月27日
取組内容	<p>○経営形態・経営面積・作付品種及び各面積 ・役員4名、従業員3名の法人経営で水稲43.2ha、施設野菜(ミズナ)1.4ha(3.6回転)、ネギ20aの複合経営。地域の担い手として、農地中間管理機構を活用して農地集積および団地化を進めている。</p> <p>○多収品種への取組状況・作付品種及び面積・品種選択の理由等 ・平成27年から飼料用米の生産に取り組んでいる。当初は「ゆめひたち」、「チヨニシキ」、「あきだわら」の3品種を栽培していたが、令和元年から飼料用米の全面積を安定的に多収である「あきだわら」1品種に切り替えた。</p> <p>○多収を達成するために取り組んだことについて ・「あきだわら」を4月下旬、主食用早生品種5月上旬、主食用および加工用中生品種を5月中旬に移植することで、収穫時期の作業効率向上および十分な登熟期間確保による収量向上を図っている。 ・令和3年から、施肥方法を全面施肥から側条施肥に変更し、省力および肥料の利用率を高めた。 ・昨年度より収量を増やすために、施肥量を3kg/10a増肥した。</p> <p>○生産コスト削減等の取組効果について具体的に記載 ・高密度播種育苗栽培技術(230g/箱)に取り組み、10aあたりの苗箱使用数を11~12枚に削減している。 ・除草剤および育苗箱施用剤は担い手直送規格を利用し、肥料はPKセーブー発肥料(BBファイト055)の予約注文でコストを削減している。</p>